

平成28年度 第2回千葉市立博物館協議会議事録

1 日 時：平成29年3月20日（月） 午後2時00分～4時15分

2 場 所：千葉市立郷土博物館 1階講座室

3 出席者：（委員） 委員長他 3人出席（5人中4人）

委員長 萩原 司

副委員長 小島 道裕

委員 広田 直行

委員 鈴木 一彦

（事務局）

大崎生涯学習部長、戎谷郷土博物館館長、小川副館長、

白根主査、学芸担当

4 議 題

- (1) 千葉市立郷土博物館のあり方（骨子）
- (2) 委員からの提言
- (3) その他

5 議事概要及び議事結果

- (1) 千葉市立郷土博物館のあり方（骨子）

事務局から委員に対して、資料1「千葉市立郷土博物館のあり方（骨子）」、資料2-①「事業評価-中期計画（試案）と平成28年度「年次評価（案）」及び資料2-②「千葉市立郷土博物館「自己点検・自己評価」（定量的・経年評価）」の内容を説明した。資料1について次回の協議会までに意見を提出すること、次回の会議では議論の内容をまとめて中間報告を作成する予定であることについて委員の了承を得た。

- (2) 委員からの提言

小島委員から「歴史展示と博物館教育」、広田委員から「ストックマネジメント-公共施設としての博物館のあり方-」をテーマにした提言を受けた。

- (3) その他

次回の第3回博物館協議会の開催日程について、平成29年6月に開催することを前提に、新年度に改めて委員の予定調整を図ることとした。

6 会議経過

午後2時00分、委員5人中4人着席（委員は欠席）。

小川副館長の司会進行により、大崎生涯学習部長の挨拶、初参加となる鈴木委員の紹介及び挨拶を行った。

その後、会議資料の確認及び運営規則第3条第3項の規定により、この会議が成立していることを告げた。また、千葉市情報公開条例25条に基づき会議を公開していることを告げ、以後、萩原委員長を議長として、会議が進行した。

議事（１）千葉市立郷土博物館のあり方（骨子）について

< 説 明 >

戎谷館長 資料１「千葉市立郷土博物館のあり方」、資料２－①「事業評価－中期計画（試案）と平成２８年度「年次評価（案）」及び資料２－②「千葉市立郷土博物館「自己点検・自己評価」（定量的・経年評価）」の内容を説明した。

< 質疑応答等 >

萩原委員長 事務局の説明についてご質問等があればお願いしたい。

萩原委員長 資料１の「主な委員意見」欄に意見などを書き込み、博物館に提出するという理解でよいか。

戎谷館長 お見込みのとおりである。資料の内容について気が付いた点、さらには、目指すべき博物館の方向性についての可否、反対意見等を含めて忌憚のない意見をいただきたい。

萩原委員長 非常に多岐に渡る内容なので今すぐ意見を出すのは困難であるが、後日、各委員の意見を館に送付してほしいということによいか。

戎谷館長 そういうことである。

広田委員 資料２－②にあるとおり、平成２６年度から２７年度にかけて来館者数が児童・一般ともに大きく伸びているが、これについて、郷土博物館はどのような活動の結果と考えているのか。

戎谷館長 主な理由の一つに観覧料の無料化がある。平成２７年からこれまで大人６０円・子ども３０円を徴収していたものを、大人・子ども共に無料化したことが大きな要素と考えられる。併せて、館の職員としても、部長の助言を受けつつ企画展の内容についてかなり充実が図れたことも大きな要素の一つになっていると思われる。

萩原委員長 いつから無料化を実施したのか。

戎谷館長 平成２７年７月１日からである。今年度の来館者実績として、現時点で、５４，０００人の数値を示している。前回報告したように、３世代２世代の子ども連れの来館者層、年齢層で表すと３０代・４０代が最多であるが、それらの世代にとって無料化が大変な魅力となっていると考えられる。

広田委員 来館者におけるリピート率はどのくらいか。

事務局 通年で集計していないため、昨年８月から１１月にかけて実施した企画展「千葉妙見大縁起絵巻の世界」で実施したアンケートの数値で代替させていただくが１０％程度である。

戎谷館長 開催期間中４回の展示替えを行ったところ、４回とも来館してくれた方もいた。アンケートに記載されたリピーターの意見には、展示した絵巻の場面変えを楽しみに来館されたとの声もいただいている。

最近海外の来館者も増えているが、もともと、当館の来館者の居住地を見ると市内と県内の数値がほぼ同割合を示す中、リピート率が１０％程度

- と言うのは比較的多い数字ではないかと評価している。
- 小島委員 企画展のテーマの一覧をいただけるとありがたい。前回データの送付を依頼した所であるがどうなったのか。
- 戎谷館長 ご指摘の通りである。HP上では一覧を掲示しているが、各企画展の分析が未完成のため送付できていない状態である。完成後すぐに各委員に送付する所存である。
- 小島委員 了解した。先程の話にも出たが、意見を資料に書き込み提出するとのことであるが、その提出期限を含め、我々の課題としていつまでに何をすべきかを把握するため、今後の協議会の開催予定を教えてください。
- 戎谷館長 前回の協議会で次年度までのおおよそのプランを提示したが、本日の協議会については、委員のそれぞれの専門分野からのレクをいただくとともに、ある程度、議論の内容をまとめて次年度の6月に中間報告を作成したいと考えている。
- なお、次年度の協議会は6月と2月の2回開催して、その中で論点を整理していくことを想定している。
- 少なくともこの2年間で、中間報告から答申案まで整理できればと考えている。この間、資料についても、館内に設けたワーキンググループ等の場で委員に協議いただいた内容を整理し、それを資料として委員に提示するというスパイラル形式による協議も考えている。したがって、これからいただく意見についても確定されたものとして扱うではなく、それをベースとして協議会等でさらにもんでいくということである。
- そのためにも、意見でなく館が提示した資料についての感想でも構わないから、次回の6月までの意見提出を委員にお願いするところである。
- 小島委員 次回の協議会で委員の意見をまとめたいので、意見の提出は次の協議会までに間に合うようにすればいいということか。
- 戎谷館長 ご指摘のとおりである。我々も意見をいただきながら、自分達の方でもそれを整理し自己革新のために反映していくことが重要と考えているので、忌憚のない意見をいただければ助かる。
- 小島委員 了解した。ある程度の時間が経った後に、改めて催促の連絡をいただければありがたい。
- 戎谷館長 企画展の一覧表と併せて、メール等により連絡したいと考えている。
- 鈴木委員 今回からの参加となるため確認の質問をしたいのだが、この評価システムに関する私の印象としては、評価がミッションが中心となり、目指す姿として提示されているが、そこから目標が示され、最終的には、郷土博物館が採るべき戦略が明らかになるのかと思われる。
- 他自治体の事例で気になるのが、静岡県立美術館では平成17年から評価システム「ミュージアムナビ」を実施しているが、これもミッションから始まりそれを通じて個別の目標が提示される形式を取っている。特徴的なのは、目標設定をかなり以前から行っているということ、一つ一つの方針ごとの評価基準「ベンチマークス」が最初に明示され、アンケートなどを通

じてどこを評価するのかを予め決定してから実施し、最終的にその結果をもって外部評価をしているが、これが参考となると思う。

郷土博物館では、館の評価基準をミッションと言う形で明示してきたのか。特に、資料1にある「めざす博物館像」として挙げた3点の内容を郷土博物館は公表しているのか。

戎谷館長

まだである。そもそも評価自体に着手していなかったというのが現実である。生涯学習振興課で発行している報告書「千葉市の社会教育」における事業数等の報告をもって評価に変えてきたが、館の運営方針を明確にしなければいけないということで、昨年から模索してきたところであり、未だ十分なレベルには達していない。ご指摘の通り、評価基準の策定は難しいところであるが、当協議会の資料を含め最終的に館のHPでミッションを公表するようになればと考えている。

鈴木委員

承知のとおり、ミッションから目標が出てくる。評価基準もそれによって出てくる。全体の統合された一貫性も出てくる。それによりやるべき事とその優先順位が明確化されていくものだが、郷土博物館の取組についても、少しずつそういう方向になっていくのかという感じがする。

議事（2）委員からの提言及び議事（3）その他

萩原委員長

小島委員から「近世」の展示が大事との指摘をいただいたが、江戸時代には、この博物館が建っている亥鼻には佐倉藩の学問所成徳書院猪鼻分校があった。私の意見として、これらをはじめとする様々な事実の提示を通じて千葉の成り立ちが分かるような展示方法を郷土博物館には考えてもらいたい。

小島・広田両委員の提言を含め、これまでの議論の全体について意見・質問等があればこの場でお示しいただきたい。

戎谷館長

両委員の提言を受けて、事務局から感想を申し上げたい。

昨今、3階常設展示の解説ボランティアから、来館者対応に関する当館の考え方や方向性を提示するよう求められている。これについて、歴史的事実をそのまま解説するのではなく、例えば、当館の展示には絵巻が多いので、来館者が絵巻を通じて歴史について考えることを支援できるような解説が好ましいと伝えた事があった。

また、前回の協議会で非来館型の対応についても検討した方が良いとの指摘を受けたが、教員に博物館活用について説明した時、一例として、絵巻の吹き出しを入れた教材を作成し、自由に子ども達に書かせてほしいと話したことがあった。今回の委員の提言と方向性が同じことが分かり喜ばしく感じた。

次に、4階常設展示では、50年前と80年前の生活に関する露出展示を設置しており、小学生の来館時には、普段は進入禁止にしている展示スペースを開放し、資料もハンズオンのものとして自由に触れさせている。今自分達が使用している道具の昔の姿と用法について子ども達は非常に興味

を感じている。このように現代との連続性を有する展示を通じて、今の自分の生活に繋がる昔の工夫を知るという学習の手法が非常に有効であることが判明した。このような体験型の展示を今後も拡充させていきたいと考えている。

次に、施設活用の点については、広範な2階フロアの効果的な活用策として、ジオラマとデジタルを活用したVR型展示の可能性について館内で話題にしている。今回の提言を受けて、来館者へのインパクト等、館の導入部となる同フロアにジオラマを設置する必要性を強く感じるきっかけとなった。

次に、城郭型博物館の是非についてである。休館日に来館された方からこの中には何があるかと良く聞かれることが端的に示しているように、城と博物館とを分けて考える市民が多い。郷土博物館ではなく「千葉城博物館」と言う方が名称として良いのかとも考えることもある。非常に難しい問題ではあるが、博物館機能と城の機能をもう一度分離したうえで、それぞれの活用方法を整理した方が良いのではないかと考えたこともあった。他自治体にも城郭の外観を有する歴史博物館や郷土資料館があるが、当館は、本来、博物館類似施設として建てられた経緯もあるため、博物館の機能としては一部弱いところがあるのも現実である。

その他、研究と展示の分離についても考えたことがあった。千葉市史編纂事業を当館でやっていること、また収蔵庫の収容能力が不足しているということもあり、調査研究機能は廃校等に機能集中させ、博物館では展示機能を充実させる分離案について検討した結果、フィールド全体に千葉市の歴史が複合的に集積されているという位置的に優れたこの場所に博物館機能を置いた方がいいということに落ち着いたのだが、施設活用の点で、調査研究と展示の分離と言う考え方がありうるのかお示しいただきたい。

鈴木委員 千葉城として考えると、確かに市民はこの名称に親しんでいるように思えるが、現在、千葉市は千葉城と言う名称を公的に使用しているのか。

戎谷館長 千葉市立郷土博物館（千葉城）のように半々である。民間で行うイベントでは千葉城と言う言葉を使うことが多いようだ。

鈴木委員 一般の人は千葉城で親しんでいる。この点で、研究と展示の分離と言う考え方にも首肯できる点がある。やはり、千葉城は城というイメージが強く建物も城郭型なので、この建物も、いわゆる博物館ではなく、広い意味でのミュージアムに位置づけたり、城の持つビジュアルイメージをうまく活用して、ジオラマなど若干テーマパーク的な、ある種エンターティナメント的な要素もあっていいのではないか。調査研究部門の機能が別のスペースで十分に設けることが可能であれば博物館と切り話して実施しても良いのではないか。

千葉城の場所そのものについては、例えば、桜の時期に遊びに来る場所とした方が分かりやすいのではと感じる。学芸員としても、本来、城のなかったところに城郭風の建物を建てて、そこで博物館を運営するというのは

複雑な思いがあるのではないかと思われる。

私としては、研究と展示の分離については積極的に検討する価値はあると思う。その場合は、この千葉城の観光的な意味が強くなるので建物の運営に関しては民間に委ねる、いわゆる指定管理者制度という手法もあるが。

博物館で指定管理者制度は成り立つか。

一部では実施している。ただ、館数としてはそれほど多くはない。

指定管理者制度は一時流行したものの、運営経費と効率性の問題でこの制度が望ましくないという方向になったことが原因で今は減りつつある。学芸員も制度導入後に人件費削除のために減らされている。そういう傾向が目立つので、指定管理者制度については功罪相半ばし、博物館における適当性についての結論は出ていない。全体的な方向としては、見直しの趨勢にあるといえるのではないか。

指定管理者制度の博物館への導入について、学芸業務には少々なじまない、社会教育施設としての継続性が保てないとの意見もある。

学芸部門と経営部門を分離している館もあるが、その結果の成否については。今の段階では私もはっきりと述べることはできない。

千葉城と言う呼び方は、昭和30年代にはされてこなかった。この呼称は観光目的でこの建物ができてからのことである。そういう経緯から、この建物の中身を博物館として使用することに関して、館側が感じる違和感は良く理解できる。

園内には縄文時代から近現代の史跡がすべてそろっている。ここを起点として調査を実施すれば、千葉の町の歴史が景観を含めて判明する等、博物館としては非常に良い立地である。

先程委員から、当館が着手すべき魅力ある展示資料の方向性としてジオラマを提示いただいた。職員としても、郷土博物館には近世の千葉の町の地図があり、これに基づき、現在展示資料を欠いている江戸時代の千葉の町をジオラマで再現できればと考えている。後学のため、望ましいジオラマの姿、ジオラマ製作のポイントなどをご教示いただきたい。

ジオラマをどのように製作するかと言うのは実は非常に悩ましい問題である。まず、縮尺の問題が非常に大きく、どのレベルの縮尺にするかでその内容も大きく変わる。人物を入れられる縮尺にするのか、もっと広範囲な範囲を製作するのかで大きくジオラマの意味が変わってくる。生活の再現を意図する場合、当然ながら個々の人物が認識できるようになる必要があるため、歴史民俗博物館にある江戸橋広小路のように30分の1の縮尺が最小化の限度となる。一方、京都の町の展示のように10分の1の縮尺で製作した場合はかなりしっかりと作った人形が必要となる。生活再現的な物を目的とするのか、それとも広域な地理的な大掴みなものを目的とするのか事前に明確にしておかないと、ただ作っただけで終わってしまう。また、来館者にジオラマの着眼ポイントを丁寧に示す必要がある。当館においても一つ一つの人物の解説を手元に置いたりなどしている。また、スポ

ットを落とすという手法もあるが、これは使っている人しか見ることができず他の人は見ずらくなる等、施設設備やITに頼りすぎるのも良し悪しである。やはり、全体を明るくして誰でも自由に見られるようにすること、見るべきポイントが提示されていることが重要である

その他には、使い方の明確化も重要である。ソフトとしてそれをどう使うか。展示はどれもそこに行きつくと思うが、その目的と活用の方法を最初から考えてジオラマを作っていくことが最も重要であるとする。

つまり、ソフト的なものプログラムのものを最初からセットで考えていくことが肝要である。

鈴木委員

歴史民俗博物館はジオラマ活用のエキスパートといえるが、私の記憶から言うと、江戸東京博物館のジオラマには人物がたくさん設置され、双眼鏡や、背後にジオラマとセッションした映像を流すなどして外からも遠くからも見られるようにしている。長崎歴史文化博物館では、出島など県内各地域にそれぞれテーマを設定し、昼夜の別や年間行事の再現を通じて生活感とかドラマ性を出していることもある。

小島委員

那覇の首里城にある巨大ジオラマは、ボタンを押すと手元に解説が出てくる等、首里城について大変よく理解できるつくりになっており大変感心した。妙に作りこむよりは、非常に精巧なものを作って丁寧に解説するのがジオラマの基本と考える。

また、ジオラマの製作には江戸後期の何時の時期の地図に基づく復元であるといった正確さが求められる。また、ジオラマが再現する時期と対象を具体的かつ正確に特定した方が却って使い勝手がよい。それにより、ジオラマが示す時代の前後の時期と比較することも可能となる。このように、ジオラマは、個別具体的な時期・時代を正確に再現して製作するのが重要である。そこを非常にごまかして一般化したものを製作すると、後になって、その限界や虚構が次第に明らかになり非常に困ることとなる。歴史的正確性がジオラマ製作の鍵といえる。

戎谷館長

千葉市はいま千葉氏についていろいろ企画展等を実施しているが、中世の武家城館の再現が調査研究の対象となっている。非常に資料が少ないのでどこまで再現できるか分からないが、改めて、ご指摘いただいた正確性が非常に大事だと理解できた。

萩原委員長

方向性が大分出てきたように見える。委員の意見を参考としてできるだけ良い博物館にしてほしい。

広田委員

本協議会の目的であるが、この千葉市立郷土博物館の活動のあり方を協議することにあるのか、それとも千葉市の博物館のあり方を協議することにあるのか改めて確認させていただきたい。

戎谷館長

郷土博物館のあり方に関する協議をいただくことにある。

大崎部長

当初、本協議会には当初郷土博物館と加曾利博物館の二つの博物館が含まれていたが、加曾利貝塚が国の特別史跡指定を目指すという方向性のもと、加曾利貝塚博物館についてはいったん本協議会から切り離して新たなグラ

ンドデザインを描くとの意図のもと、史跡整備委員会という付属機関を新設しその中で審議を進めていくこととなっている。

郷土博物館については、過去10億近い経費を投入して耐震化工事を実施した経緯がある。市議会から、それだけの経費を投入したからこそ、城郭風建物を維持しながら当面どういう博物館を目指すか議論すべきと指摘されてきたが、これまで中々具体的な方向性を示すことができなかった。

その後、加曽利貝塚が一つの方向性を出さなければならない時期に来たという状況になったということ、無料化により市民の両施設への来館を小促すと共に、見せるだけの博物館から体験できる博物館に変えていく等、抜本的に全体の展示や施設を見直す時期に来ている。郷土博物館について自分の頭にあるのは、現状、城郭風建築を壊すという発想は現実的でないことから、施設の外見は維持しながら中身をどういう形でアレンジして、展示物を含めた手法をどう見直していくか、郷土博物館の役割・機能が市民からの評価を得られるのかと言うことのいわばランドデザインを委員各位に議論いただきたい。長期的な目指すべき郷土博物館の形を議論いただくのもよいが、それよりも先に5年後をめどにした郷土博物館のあり方について提言をいただけると大変ありがたい。

葉際委員長

他に質問等無いか。それでは意見等無いので本日の議題を終了します。進行を事務局に返します。

小川副館長

次回の第3回博物館協議会については、6月を目途に開催を予定しているので、新年度になったら日程調整のご案内する。また、本日の協議会の結果を議事録として整備して、先程ご指摘のあった意見を取りまとめる必要もあるためなるべく早く委員にお知らせします。

小川副館長の挨拶により、平成28年度第2回千葉市立博物館協議会を終了した。

問い合わせ先

千葉市立郷土博物館

TEL 043-222-8231